



## 私が見る夢

---

最初から夢だと分かる夢というのは、あまりないように思う。途中で、あっ、これは夢だと気づく場合が多い。けれど、ごくたまに夢だと最初から分かるものもある。

そういう夢は、色がないのだ。モノクロの支離滅裂な夢を見る。今、私が見ている夢も、モノクロだった。

私の目の前には、数人のレインコートのような黒いフードを被った集団が、何やら大きな麻っぽい質の茶色い袋を運んでいる。袋はこれ以上入れられないほど、パンパンに膨れている。それを重みを感じていないかのように、フードを被った者たちは、スイスイと運んでいく。

そして、袋をどんどん山のように積み上げていく。一体何があんなに詰まっているのだろう。どうしてこの人たちは、こんなにたくさん積み上げているのだろう。

私は、黒いフードの集団が、黙々とその作業を繰り返しているのをぼんやりと見ていた。この人たちはどこからこの袋を運んでいるのだろうと、袋を運んでくる人達を目で辿っていくと、大きく頑丈そうな扉のついた倉庫から、何人もの黒いフードの集団が、吸い込まれては、吐き出されてくる。

「あの人たちはね、依頼されてるのよ。この世の中のいらないものをあの袋に詰めて、それを処分するように言われてるの。それを黙々とこなすのよ。永遠に終わりのない作業をさせられるのよ」

いつの間にか私の後ろに、三島さんが立っていた。三島さんは、何の感情も読みとれないくらいの無表情で、私の方を見つめて言った。

「ねえ、不思議だと思わない。あの人たち同じ作業を繰り返しているのに、まったく不満を言わないの。きっと感情をどこかに置いてきてしまったのね。例えば、自分の運んでる袋に詰めて捨ててしまったのかもしれないわ」

三島さんは、大きく目を見開く。彼女は、感情が高ぶってくると、目を大きく見開く癖がある。けれど、いつもとは違い、彼女は冷静そうに見える。しかし彼女は、いつもより

目を大きく見開いて、私をまっすぐ見つめている。これ以上無理だろうと思うほど、彼女が目を見開いて話すので、私は彼女の大きな目が、そこからこぼれ落ちるのではないかと、心配になるくらいだ。だんだん、彼女を見ているのが恐ろしくなり、私は視線を逸らした。黒いフードの集団は、積み上げた袋を今度は、またどこかへ持っていく。目で追っていくと、その人たちが運んだ先には、キラキラと光輝く細長い帯のようなものがある。目を凝らして見ていると、それがやがて川に変わる。澄んだ水は、光を放ち緩やかに流れていく。黒いフードの集団は、ドサッと袋を乱雑に下ろし、今度は頭上に高く持ち上げ力いっぱい

放り投げる。バシャッという水音とともに、水が大きく跳ね上がる。ゆらゆらと袋は川の水を含みながら、流されていく。流されるごとに、袋が徐々に平たくなっていく。

そして、あれだけ澄んでいた川が、どんどん白く濁っていく。あれだけ綺麗だった川が、どんどん薄汚く濁っていく。その光景を見ながら、切なく辛い気持が募っていく。

気づくと、やめてよ、やめて、と私は叫んでいた。どれだけ大声を出しても、黒いフードの集団は振り返ることも、手を止めることもなく、淡々と作業を続ける。その間も、川はどんどん濁っていく。私は、訳の分からないことを大声で叫びながら、その集団に近づこうと走り出した。けれど、どれだけ走っても、その人たちには近づくことが出来ない。たくさんの袋を放り込んでいるはずなのに、袋の山は減ることはない。倉庫からまた新たな袋を運び、山を作る。川だけが、どれだけ袋が投げ込まれたかを理解させた。私は、必死でその集団に少しでも近づこうと走り続けた。

## やがて訪れる長い夜

---

目が覚めると、ぐったりするほどのだるさを感じる。さっきまで、本当に全速力で走っていたように思えるくらいだった。体から嫌な汗が噴き出して、下着がしっとり肌を吸いつき気持ち悪い。体を起こすと下着を着替えた。それと同時に、ドサツというものが落ちる音と、バシャツツという水音がする。ゆっくりと顔を窓の方に向ける。締め切った窓とカーテンは、外の街灯の光を吸い込んで、ぼんやり白っぽく見える。窓をそろそろと開けて、外の様子を見る。寝る前と変わらず、街灯と、黒光りして見える道路しか見えない。その間も、ものが落ちる音と、水音は止むことはない。

音に耳を澄ませていると、やはり川の方から聞こえるような気がする。水音がした時、川であるとは思っていたが、何となく直視するのが嫌だった。黒い集団の話聞いた時、私の夢と同じだと、三島さんに言えずにいた。ただの偶然だと思いたかった。そんな怪しい集団が、実際にいて、私のアパートのすぐ近くで、意味不明な行動を繰り返しているなどと、到底信じたくなかった。

そろそろと窓を閉めて、カーディガンで羽織ってベランダに出る。すると音は、止んだ。ベランダ用のサンダルに足を入れると、ひんやりとした感触が足の裏に伝わってくる。橋の上にある街灯がポツポツと光を放ち、橋の上を寂しげに照らしている。川は、闇を吸い込んで黒々として見え、表面が街灯や月明かりで、ゆらゆらと頼りなげに光を放ち、揺れている。耳をすますが、何の音も聞こえてこない。じっと見ていると、川の傍で何かが蠢いているようだが、気のせいでもあるように思えた。

三島さんから聞いた話と、変な夢を見たせいだろうと思い、寒気を感じて肩を竦める。カーディガンに腕を通して、ベランダから部屋に戻る。カーテンを閉める前に、川の方を見たけれど、いつもの静けさがそこに広がっているだけだった。

しばらく三島さんを見ないなと、不思議に思い管理人に話を聞くと、三島さんは引っ越したと言った。何でも、連日妙な夢と、変な音がするから嫌だとか、三島さんの隣の空き部屋に誰か住んでるみたいだと、おかしい話ばかりして怖がるから引っ越してもらったと、眉を顰めながら管理人は、数回頭を振った。

管理人は、三島さんが引っ越したと言ったけれど、私はいなくなったのではないかと思う。確かに、最近の三島さんはおかしかった。急に、怒り出したり、玄関の前に誰かがいて、いつも迎えに来るような気がすると言っていた。そして、見なくなる前に一度話をした。川が濁る理由がついに分かった、と言っていた。私が聞くと、その証拠をしっかりと掴むために、今日、調べに行くのだ、と言っていた。三島さんは、目を大きく見開いて、何度も頷く。何かを恐れるように、声が聞き取れないほど小さな声で、三島さんは、最後に言った。

夢を見なくなった時が怖いよ。それから眠れなくなる。あの人たちには、言い訳を並べ立てない方がいい、とも言っていた。正直に言うのよ。何のことか聞こうとしたが、三島さんは、それだけ言うとすぐに部屋に戻っていった。閉められた三島さんの部屋の扉は、何かを拒絶するかのよう、重たげにそこにあった。

今日は夢を見なかった。三島さんの部屋に人の気配を感じる。妙な胸騒ぎがして、カーディガンを羽織って、そろそろと玄関を開ける。アパートの外にある蛍光灯の明かりが、点いたり消えたりを繰り返している。私は、三島さん、と気配のする彼女の部屋の中に向かって声をかける。けれど、声が返ってくることはない。ひっそりと静まり返っていた。ドサッという音とともに、水音が聞こえ始める。私は、アパートの階段を駆け下り、走って川に架かる橋を目指す。川の方に目を凝らすと、夢で見たような黒いフードを被った人たちがいる。黒いフードを被った集団は、川に何か放り投げている。川が濁っているかどうかは、暗くてよく分からない。その集団の中に、三島さんがいるような気がした。人がいらなくなったものたちを集めて、ここに捨てに来る。もし、それが本当だとしたら、ここは、行き場のない感情の掃き溜めみたいなものだろうか。ふとそんなことを思った。

ふいに誰かの気配を感じて、振り返ると黒いフードを被った人が、私の後ろに立っていた。どんと私に近づいて、私に袋を手渡そうとする。いえ、私はただ見ているだけです、と呟いたつもりが、上手く言葉になっていなかった。

私は何か言わなきゃと思って、頭の中で言葉を組み立てようとする。けれど、どれも言い訳めいて、白々しい言葉ばかりだった。三島さんの言った言葉が、頭の中を駆け巡っていく。夢を見なくなった時が怖い、それから眠れなくなる。言い訳は駄目。

ゆっくりと口を開いて、私はまだ眠れるわ、そんな言葉を言おうとしている。私は、何でこの人を納得させる言葉を探そうと、必死になっているのだろう。なぜ、夢と現実の区別が、つかなくなってきたんだろう。私がグルグルと意味不明な言葉を思い浮かべては、混乱していく中でも、黒い集団は淡々と、袋を川に投げ込んでいく。あの袋は一体どこから来るのだろう。山になった袋は、どうやって運んだんだろう。なぜあんなにもあるんだろう。三島さんは、トラックを見たと言っていたが、そんなものは見当たらない。

それが知りたくて、私は必死に袋の傍に目を凝らす。ドサッというものが落ちる音が、どこからするのか分からない。音のする辺りには、闇が広がっているだけだ。やがて集団の何人かが、私を見ていることに気づいた。振り返ると、私の傍に袋が置いてある。そっと触れると、袋のざらざらした感触が、伝わってきた。私の後ろに立っていた人は、いつ間にかいなくなっていた。どうすればいいのか、分からないまま、適当に誤魔化してここから立ち去ろうか、ふいにそんなことを思う。そうして、考えあぐねている間も、私を急かすようにものが落ちる音と水音は、止むことはなかった。